

「コミュニケーションの臨界—障害と体験継承」

水島久光（東海大学）

福島智や天島大輔ら「当事者」による障害学研究が知られるようになって、いかにコミュニケーションを創造し、それによって孤立状態から脱するかという課題の重さが突きつけられた。その一方で彼らの実践的研究は、図らずも「言語」の本質への問いに向かい、かつ旧来の「言語」理解に支配されない、新たな意味生成の場に自己—他者関係を開く可能性をも示唆している。

こうした前言語的あるいは指標的とでもいうべき領域について伊藤亜紗は、手を介した感覚情報をコミュニケーションの一環として捉える方法論を提示する（『手の倫理』2020）。これまで身体性あるいは情動と名付けられることによって、「言語」世界から一線を引かれ、微分されてこなかった領域に、むしろ「言語」を支える土壌としての役割を見たとき、我々の社会的な身構えはどのように変わるのだろうか—戦争体験の継承をめぐる現れる「失語」と「クリシェ」に、この問いを敷衍させて考えてみたい。

参考文献：

- 福島智『[盲ろう者とノーマライゼーション](#)』明石書店、1997
天島大輔『[しゃべれない生き方とは何か](#)』生活書院、2022
斧谷彌守一『[言葉の二十世紀—ハイデガー言語論の視角から](#)』ちくま学芸文庫、2001
伊藤亜紗『[手の倫理](#)』講談社、2020
D.ブーニュー『[コミュニケーション学講義—メディアロジーから情報社会へ](#)』書籍工房早山、2010、西兼志訳
S.フロイト『[失語論](#)』平凡社、1995、金関猛訳
水島久光『[戦争をいかに語り継ぐか—「映像」と「証言」から考える戦後史](#)』NHK 出版、2020